

(様式第4号) 交流・文化施設等運営管理計画検討委員会(第1回ホール検討委員会) 会議概要

1	会議名	交流・文化施設等運営管理計画検討委員会(第1回ホール検討委員会)
2	日時	平成23年1月19日 午後1時00分から後2時30分まで
3	会場	上田市役所3階 第1応接室
4	出席者	津村委員長、関田委員、渡辺委員、成沢委員、関口委員、金井委員
5	市側出席者	宮川政策企画局長、中部文化振興課長、滝沢課長補佐、 室賀交流・文化施設建設準備係長、徳田主査
6	運営支援業務受託者	A.T.Network 近江哲朗氏
7	公開・非公開等の別	公開 ・ 一部公開 ・ 非公開
8	傍聴者	0人 記者 1人
9	会議概要作成年月日	平成23年1月20日

協議事項等

- 1 開会(宮川政策企画局長)
- 2 委員長選任
事務局：委員長の選出を行いたいが、事務局に案があるのでご了承願いたい。
委員：(了承)
事務局：委員長を津村委員にお願いしたい。
委員：(了承)
- 3 委員長挨拶(津村委員長)
委員会では「よいものをつくる」ということを最大の目的にして進めていきたい。この会議では交流・文化施設等整備計画の内容を基に発言をいただきたいが、ハードの部分について詳細に議論を始めるときりがないので、とくに事業展開に関連した発言をお願いしたい。
- 4 協議事項
委員長：会議を進めるにあたり交流・文化施設整備計画の冊子をベースとしてこの整備計画のことで事務局から補足する部分があればお願いしたい。
事務局：整備計画の19ページに事業方針、20ページに事業内容を記載している。この他にどのようなもの加えていけばよいのか、などを議論いただきたい。
委員：私たちの会は、長年の経過において進歩的な会館をお願いしたいと要望してきたが、設計者の提案はイメージが違う。大ホールの1,700席というものが妥当かどうか、また4層客席(1階席プラス3層バルコニー席)となっており、もっと圧縮して、見やすい、使いやすい状態にしてはどうか。300席の小ホールについては、やはり多目的に音楽や舞台にも使いたい。それから、リハーサル室のイメージは純正なるリハーサル室というものが妥当。こういった内容は基本設計ができてからでは遅く、現段階で根本的な話し合いをしたい。
委員：1,700席というのは、ある程度目安にしてよいのではないか。これから検討されると思うが、客席可変装置が付けば、まさに大ホールと中ホールと二本立ての使い方ができる。小ホールについては、音楽関係者は非常に強く固定席を希望してきたが、リハーサル室は演劇もできるようなりハーサル室が第3のホールとしてできるなら、これは非常に贅沢な、恵まれた設備になるのではないか。
委員：キャパシティがすべてを物語るわけではないが、吹奏楽関係から言うと1,500席以上2,000席弱といったところでなければ恐らく県大会の催しができない。
委員長：ハード面の議論が先行しているが、事業面は後にそれぞれお聞きすることとして、引続きこのハード面について専門的な立場からご意見をいただきたい。
委員：平成20年実施の市民アンケート結果によると、かなり多くの方々が、「上田でも一流の音楽家やオーケストラ、バレエ、そういうものを観たい」と要望されている。これらを提供している私の立場からいうと、一流の音楽家の皆さんは劇場を選ぶ。現状では、上田というのは、今

までなかなか候補として挙がらない。一流のものを見せるためには、外部から、例えば新聞社、テレビ局、プロモーターなどが「上田に良い劇場があるから、あそこへ行ってやろう」となることが必要。そういった点でやはり1,700席ぐらいは必要ではないか。

委員長：外部の方が使うという点は非常に重要であると思う。それから、上田という新幹線を使えば東京に限りなく近い場所が、果たして有効なのかどうかというような問題なども、これからお聞きしていきたい。

委員：以前まつもと市民芸術館のプロデューサー兼支配人を務めたが、自主事業は集客が厳しい。そうすると1,000~1,200席ぐらいがもうギリギリだと思う。ところがプロモーターさんなどはやっぱり2,000に近いものは欲しいと言う。ここは運営していると矛盾が生じるところで、「自主事業でもうちょっと入れたいけど入らない。でも貸館だと1,500じゃ少ない」という状況。実際には自主事業でやると1,000というのが実感。上田市内にいくつかホールがあるが、それらの役割はどのように考えるべきか。

事務局：整備計画では、上田文化会館（約500席）、丸子文化会館（約800席）などを活かしつつこのホールを運営していきたいとしているが、どのように差別化するか具体的な検討には至っていない。

委員：小ホールも含めて、どのように上田のイメージを出すかが課題。音楽中心という方向性をはっきり出した方が、施設としては強くなるのではないか。ところで、整備計画に「創造・創作支援」や「育成」とあるがその稽古はどこでやるのか。数は足りているのか。

委員長：本格的に創造事業をやろうとすると練習室などの諸室が足りない。このリハーサル室も、実はメリット・デメリットがあると思う。本当にホールとして利用され始めると、リハーサル室としては利用できなくなる。

委員：上田文化会館の練習室は稼働率が非常に高く、様々なサークルで使われている。また、信州国際音楽村「ホールこだま」は市内ピアノ教室の発表会場として人気が高い。

委員長：ハード面の議論が深まってきたので、次に、このホールでどのような事業を進めるべきか、専門的な立場からお話をいただきたい。

事務局：ハード面の検討について予めご承知いただきたいが、午前の全体会議でお示した施設イメージ図等は、設計者選定の過程における提案に過ぎず、あくまでもこれを基本とした設計検討を行っている。大ホールについては、席数やバルコニーの数など、最終的な結論に至っていない。小ホールについても、固定席で多目的に使える、という点が整備計画の基本であり、その部分は設計業者側に伝えているところ。また、リハーサル室についても、提案図には可動席が示されているが、現在の検討の中では可動席は除かれている。今後、市長アドバイザー会議、それから設計検討専門会議においても、基本的には整備計画の理念を設計に活かすという前提で進めている。

委員長：整備計画書を踏まえ、この上田の新しいホールでの事業展開についての意見をいただきたい。

委員：上田の「顔」として、この新しい文化拠点から発信する、定期的なフェスティバルなどの催しを考えてはどうか。例えば「上田国際音楽祭」という実行委員会形式の、上田にいる音楽関係の皆さんが揃ってボランティアを組織し、市も加わって行うことを提案したい。「仙台クラシックフェスティバル」や「松本のサイトウキネン・フェスティバル」などが類似した事例としてある。もう一つは、東京のオーケストラとフランチャイズ契約を締結し、年に1~2回上田定期公演を行うような手法。さらに管理・運営体制については館長に有名人を据えるということも上田の「顔」をつくる上で大切。

委員：ハードを宣伝するのではなく、ソフトをアピールする。これだけの施設をつくるのであれば、そういう考え方も大事ではないか。

委員：「サイトウキネン・フェスティバル」はとても上手に運営されていて、最初は批判もあったと聞かすが、これだけ続いて、結局今は市民権を得ているのではないか。

委員：整備計画書にある事業計画の大半が、このフェスティバルの中でできる。地域と子どもたちをアウトリーチで、また美術館のなかで小さいコンサートをやってもよい。

委員：「継続は力なり」で、最初から大きなものを目指しても難しい。ボランティアによる「友の

会」のような組織を設立する必要がある。

委員長：フェスティバルというのは、全国的に見ても、ホールが自主事業としてホールの予算を使って開催している例は少なく、多くは地域と役割分担をしながらやっている。ホールの役割というのは、基本的には場をいかに有効に提供していけるかということが中心になるため、地域の催し物として、その自治体全体がどのようにそのフェスティバルを支えていくかということがなければ、1回か2回で終わってしまう。

委員：運営方式について、直営にするのか、指定管理者にするのかということは、後に組織体制の検討で出てくると思うが、最終的にはこれは市が決めることだと思う。今まで全国の例を見ると、新しいホールができた場合、ホールの運営経験がある財団法人などがある場合は、開館後すぐに指定管理となる場合が多い。

委員長：開館当初は直営からスタートする方がホール運営としては安定すると思う。ただ、直営だからといってすべてを市の職員がやるわけではなく、そこにプロを雇用して契約していくという形がよい。

委員：上田市の場合も、やはり数年間は直営で運営し、その中で運営の基礎を作っていくべきかと思う。

委員長：この問題はやはり最終的には市の判断ということになる。事業についての意見をもう少しいただきたい。

委員：ホールを作ってお客様を入れるという事は、やっぱり「商売」であり、この感覚を抜きにしては絶対に無理だと思う。また、市民に足を運んでもらうことから始めるということは必要。

委員：何か事業の「核」になるものが必要であり、それを作ることによって全国に上田のホールが知れていくという事は非常に重要。またこのホールは地理的な優位点はあると思う。

委員長：地理的に東京に近いため、逆に、東京に行くほうがよいという市民が多くなれば、チケットは売れない可能性が出てくる。これが諸刃の剣として、事業を組み立てていく中でいちばん難しい部分になっていくと思う。

委員：やはり「顔」が必要だと思うが、施設の基本理念のところに「育成」が出ており、この点を重視すべきではないか。

委員：文化施設の愛称を公募して、みんなに親しまれるようなネーミングをする。「アリオ上田」に負けないような、愛される、そういう愛称を付けるべき。

事務局：愛称の場合、施設全体をイメージする愛称と、ホールをイメージする愛称と、二つそれぞれあるが、どのような考えるべきか。

委員：まだ具体的にはイメージは浮かばない。

委員長：時期が迫ってきた時点で考えるべきではないか。

委員：「館長」を考えると、指定管理者制度になると、位置づけがわかりにくくなるという面がある。

委員：名誉館長を置いている施設もあるが…。

委員長：そろそろ終了の時間が迫っているが、次回からはもう少し具体的に、整備計画 19ページの事業計画を踏まえ、どういう事業の展開をしていくべきかを詰めていきたい。では、第1回のホール検討委員会はこれで終わりたいと思います

5 次回（第2回）日程

事務局：2月8日（火） 午前11時10分から

委員：（了承）

6 閉会